

資料 1-3

Doc No. L5-95JY211 R0

2020 年 10 月 14 日

三菱重工業株式会社

補足説明資料 16-2

16 条

燃料体等の取扱施設及び貯蔵施設

臨界防止機能に関する説明資料

目 次

1. 要求事項	1
2. 要求事項への適合性	4
3. 参考文献	26

別紙 1 臨界解析における条件設定根拠について

別紙 2 臨界解析に使用する解析コードについて

1. 要求事項

特定機器の設計の型式証明申請において、MSF-24P型の臨界防止機能に関する要求事項は、以下のとおりである。

(1) 設置許可基準規則要求事項

①設置許可基準規則第 16 条第 2 項一号ハ

- ・燃料体等が臨界に達するおそれがないものとする。

②設置許可基準規則解釈別記 4 第 16 条 1 項

- ・第 16 条第 2 項第 1 号ハに規定する「臨界に達するおそれがない」とは、第 5 項に規定するもののほか、貯蔵事業許可基準規則解釈第 3 条に規定する金属キャスクの設計に関する基準を満たすことをいう。
- ・貯蔵事業許可基準規則解釈第 3 条
 - 一 使用済燃料貯蔵施設における金属キャスクは単体として、使用済燃料を収納した条件下で、技術的に想定されるいかなる場合でも臨界を防止する設計であること。
 - 二 金属キャスク内部のバスケット（金属キャスク内に収納される使用済燃料を所定の幾何学的配置に維持するための構造物をいう。以下同じ。）が臨界防止機能の一部を構成する場合には、設計貯蔵期間を通じてバスケットの構造健全性が保たれる設計であること。
 - 三 使用済燃料貯蔵施設は、当該施設内における金属キャスク相互の中性子干渉を考慮し、技術的に想定されるいかなる場合でも臨界を防止する対策が講じられていること。
 - 四 臨界評価において、以下の事項を含め、未臨界性に有意な影響を与える因子が考慮されていること。

①配置・形状

貯蔵エリア内の金属キャスクの配置、バスケットの形状、バスケット格子内の燃料集合体の配置等において適切な安全裕度を考慮すること。

金属キャスクが滑動する可能性がある場合には、滑動等による金属キャスクの配置の変化に伴う中性子実効増倍率の増加についても適切に考慮されていること。

事故時にバスケット及び使用済燃料集合体の変形（損傷）する可能性がある場合には、臨界解析においてもこの変形（損傷）が適切に考慮されていること。

②中性子吸収材の効果

中性子吸収材の効果に関して、以下の事項等が適切な安全裕度をもって考慮されていること。

- a) 製造公差（濃度、非均質性、寸法等）

b) 中性子吸収に伴う原子個数密度の減少

③減速材（水）の影響

使用済燃料を金属キャスクに収納するに当たり当該使用済燃料が冠水することが、設計上適切に考慮されていること。

④燃焼度クレジット

燃焼度クレジット（臨界評価において、使用済燃料の燃焼に伴う反応度低下を考慮することをいう。）を採用する場合には、以下の事項を含め、適切な安全裕度を有する設計であることが確認されていること。

a) 燃料集合体の燃焼度及び同位体組成並びにそれらの分布の計算精度

b) 貯蔵する燃料集合体の燃焼度等の管理

五 使用済燃料を金属キャスクに収納するに当たっては、臨界評価で考慮した因子についての条件又は範囲を逸脱しないよう必要な措置が講じられること。

③設置許可基準規則解釈別記4第16条5項

- ・ 第16条第2項第1号ハ及び同条第4項各号を満たすため、兼用キャスクは、当該兼用キャスクを構成する部材及び使用済燃料の経年変化を考慮した上で、使用済燃料の健全性を確保する設計とすること。ここで、「兼用キャスクを構成する部材及び使用済燃料の経年変化を考慮した上で、使用済燃料の健全性を確保する設計」とは、以下を満たす設計をいう。
- ・ 設計貯蔵期間を明確にしていること。
- ・ 設計貯蔵期間中の温度、放射線等の環境条件下での経年変化を考慮した材料及び構造であること。

(2)原子力発電所敷地内での輸送・貯蔵兼用乾式キャスクによる使用済燃料の貯蔵に関する
審査ガイド確認事項

「2.安全機能の確保 2.1 臨界防止機能」には、以下のように記載されている。

【審査における確認事項】

『

- (1) 設計上想定される状態において、使用済燃料が臨界に達するおそれがないこと。
- (2) 兼用キャスクの臨界防止機能をバスケットで担保している場合は、設計上想定される状態において、バスケットが臨界防止上有意な変形を起こさないこと。

』

【確認内容】

『

以下を踏まえ臨界防止設計が妥当であること。

1) 配置・形状

兼用キャスクの配置、バスケットの形状、バスケット格子内の使用済燃料集合体の配置等において、適切な安全裕度を考慮するとともに、設計貯蔵期間を通じてバスケットの構造健全性が維持されること。

兼用キャスクが滑動する可能性がある場合は、滑動等による兼用キャスクの配置の変化に伴う中性子実効増倍率の増加についても適切に考慮すること。

2) 中性子吸収材の効果

中性子吸収材の効果に関して、以下について適切な安全裕度を考慮すること。

- a. 製造公差（濃度、非均質性、寸法等）
- b. 中性子吸収に伴う原子個数密度の減少

3) 減速材（水）の影響

使用済燃料を兼用キャスクに収納する際、当該使用済燃料が冠水することを、設計上適切に考慮すること。

4) 検証され適用性が確認された臨界解析コード及びデータライブラリを使用すること。

5) 設計上、バスケットの塑性変形が想定される場合は、塑性変形したバスケットの形状及び使用済燃料の状態を考慮しても未臨界が維持されること。

』

2. 要求事項への適合性

審査ガイドでは、兼用キャスクの有する安全機能（臨界防止機能、遮蔽機能、除熱機能及び閉じ込め機能）に係る設計の基本方針の妥当性を確認することが定められており、MSF-24P 型の臨界防止機能については、以下のとおり審査ガイドの確認内容に適合している。

〔確認内容〕

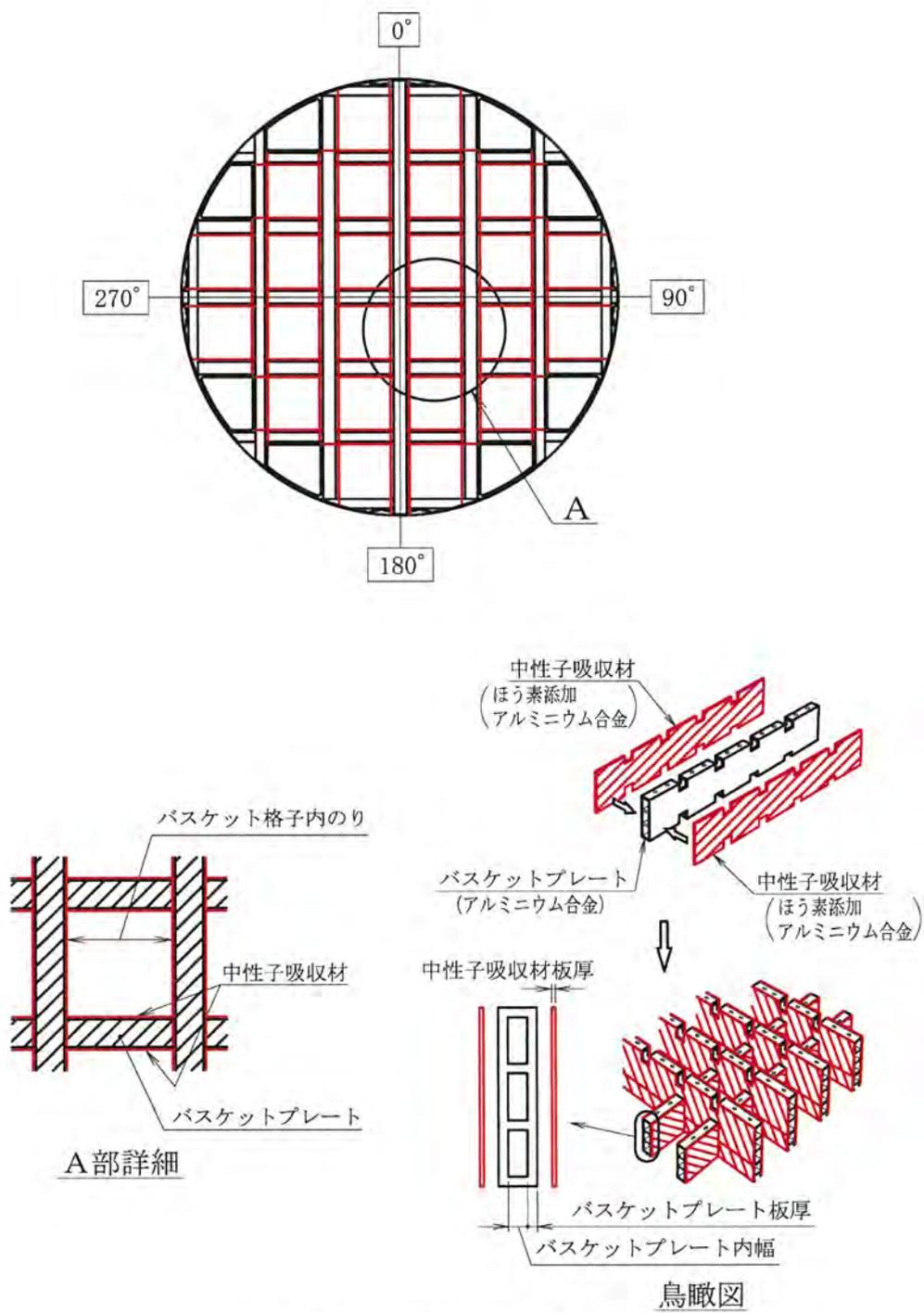
1) 配置・形状

兼用キャスクの配置、バスケットの形状、バスケット格子内の使用済燃料集合体の配置等において、適切な安全裕度を考慮するとともに、設計貯蔵期間を通じてバスケットの構造健全性が維持されること。

MSF-24P 型の貯蔵施設への搬入から搬出までの乾燥状態、及び MSF-24P 型に使用済燃料を収納する際の冠水状態において、技術的に想定されるいかなる場合でも、臨界を防止する設計とする。

MSF-24P 型のバスケットは、断面形状が中空状であるアルミニウム合金製のバスケットプレートで構成された格子構造であり、個々の使用済燃料を MSF-24P 型本体内部の所定の位置に収納する。また、バスケットプレートと中性子吸収材を併せて配置することで臨界を防止する構造とする。（第 1 図参照）

また、設計貯蔵期間を通じてバスケットの構造健全性を維持する設計とする。詳細は補足説明資料 16-6 の「材料・構造健全性に関する説明資料(L5-95JY215)」に示す。



第1図 バスケット構造図

[確認内容]

1) 配置・形状

兼用キャスクが滑動する可能性がある場合は、滑動等による兼用キャスクの配置の変化に伴う中性子実効増倍率の増加についても適切に考慮すること。

2) 中性子吸収材の効果

中性子吸収材の効果に関して、以下について適切な安全裕度を考慮すること。

a. 製造公差（濃度、非均質性、寸法等）

b. 中性子吸収に伴う原子個数密度の減少

3) 減速材（水）の影響

使用済燃料を兼用キャスクに収納する際、当該使用済燃料が冠水することを、設計上適切に考慮すること。

4) 検証され適用性が確認された臨界解析コード及びデータライブラリを使用すること。

MSF-24P 型の臨界解析フローを第 2 図に示す。臨界解析では、MSF-24P 型及び使用済燃料集合体の実形状を三次元でモデル化し（第 3 図から第 6 図参照）、解析コードとして SCALE コードシステム（別紙 2 参照）を用いる。

解析条件は第 1 表から第 3 表のとおりとする。なお、乾燥状態での臨界解析に加え、MSF-24P 型内は使用済燃料を収納する際の冠水状態を考慮し、中性子実効増倍率が最も大きくなる水密度を 1.0g/cm^3 とした解析を行う。

また、臨界評価では、収納する使用済燃料の濃縮度上限値を用いるとともに、燃焼度クレジットは採用しない。

本評価においては、以下の点について保守性を有している。

・収納制限に対する解析条件の保守性

—MSF-24P 型に収納する使用済燃料のウラン濃縮度は照射により減損しているが、燃焼度 0Gwd/t の減損していない新燃料とし、 17×17 燃料はウラン濃縮度 $4.1\pm\boxed{}\text{wt}\%$ 、 15×15 燃料はウラン濃縮度 $4.0\pm\boxed{}\text{wt}\%$ を保守的に $4.2\text{wt}\%$ 及び $4.1\text{wt}\%$ とする。

—収納する使用済燃料には可燃性毒物としてガドリニウムを添加した燃料棒が含まれる場合があるが、中性子吸収効果のあるガドリニウムの存在を無視し、すべて通常のウラン新燃料とする。

—使用済燃料とともにバーナブルポイズン集合体を収納する場合もあるが、中性子吸収効果のあるバーナブルポイズン集合体を無視する。

・モデル化の保守性

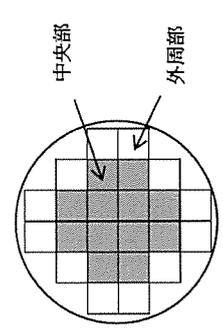
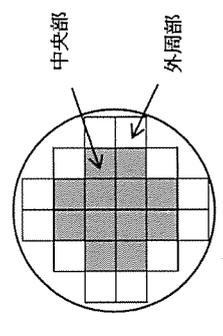
—MSF-24P 型が無限に配列した体系（完全反射）とする。これにより、MSF-24P 型の滑動を考慮しても、MSF-24P 型の配置制限は必要なく、MSF-24P 型相互の中性子干渉も包絡する評価となる。

- ーバスケット格子内で燃料が偏ることにより中性子実効増倍率が変化するため、バスケット内の燃料の配置は中性子実効増倍率が最も大きくなる配置とする。具体的には、乾燥状態では外周部及び中央部の燃料ともに中心偏向配置とし、冠水状態では外周部の燃料は外周に、中央部の燃料は中心偏向配置とする。
- ーバスケットプレート及び中性子吸収材は第4表に示す通り、製作公差を考慮し、中性子実効増倍率が最も大きくなる寸法とする。
- ー中性子吸収材中のほう素の均質性は製造管理により担保し、ほう素添加量は仕様上の下限値とする。
- ー中性子遮蔽材は無視する。
- ーバスケットプレート及び中性子吸収材は、中性子の吸収が小さくなるように、燃料有効部に相当する部分のみモデル化することとし、それ以外の部分は水または真空に置換する。

第1表 (1/2) MSF-24P型解析条件の概要 (17×17燃料収納時)

項目	17×17燃料		解析条件	
	キヤスク収納位置制限	中央部	外周部	外周部
種類	48,000MWd/t型 (A型・B型)	48,000MWd/t型 (A型・B型)	48,000MWd/t型 (A型・B型)	48,000MWd/t型 (A型)
	39,000MWd/t型 (A型・B型)	39,000MWd/t型 (A型・B型)	39,000MWd/t型 (A型・B型)	
初期濃縮度 (wt%)	≦4.2		4.2	
ウラン重量 (kg)				
最高燃焼度 (GWd/t) (燃料集合体平均)	≦48	≦44		0
冷却期間 (年)	A型: ≧15 B型: ≧17		-	
最高燃焼度 (GWd/t)	≦90	-		-
冷却期間 (年)	≧15	-		-
平均燃焼度 (GWd/t)	≦44		0	
配置				

第1表 (2/2) MSF-24P 型解析条件の概要 (15×15 燃料収納時)

項目		15×15 燃料			
		キヤスク収納位置制限		解析条件	
種類		中央部	外周部	中央部	外周部
収納物仕様	燃料集合体 1体の仕様	48,000MWd/t型 (A型・B型)	48,000MWd/t型 (A型・B型)	48,000MWd/t型 (A型)	
		39,000MWd/t型 (A型・B型)	39,000MWd/t型 (A型・B型)		
	初期濃縮度 (wt%)	≦4.1			4.1
	ウラン重量 (kg)				
	最高燃焼度 (GWd/t) (燃料集合体平均)	≦48	≦44	0	
	冷却期間 (年)	A型 : ≧15 B型 : ≧17			—
	最高燃焼度 (GWd/t)	≦90	—	—	—
	冷却期間 (年)	≧15	—	—	—
	平均燃焼度 (GWd/t)	≦44			0
	配置				

第2表 臨界解析用の燃料集合体の仕様

項目	単位	仕様	
燃料集合体の種類	—	17×17 燃料 48,000MWd/t 型 (A 型)	15×15 燃料 48,000MWd/t 型 (A 型)
燃料材質	—	二酸化ウラン	二酸化ウラン
被覆管材質	—	ジルコニウム ^(注1)	ジルコニウム ^(注1)
燃料密度	%理論密度		
燃料棒直径	cm		
ペレット直径	cm		
被覆管肉厚	cm	0.057	0.062 ^(注3)
燃料有効長	cm		
燃料棒配列	—	17×17	15×15
燃料集合体当たりの燃料棒数	本	264	204
燃料棒ピッチ	cm		
燃料集合体の幅	cm		
初期濃縮度	wt%	4.2	4.1

(注1) 実際の仕様はジルコニウム合金（ジルカロイ-4）であるが、解析上は純度 100%のジルコニウムとして扱う。なお、他の合金成分（スズ等）は中性子吸収効果がジルコニウムより大きいため、この取扱いは保守的である。

(注2) (燃料棒ピッチ) × (燃料棒配列数) を臨界解析上の燃料集合体の幅とする。

(注3) 15×15 燃料 B 型燃料のペレット直径は cm、被覆管肉厚は 0.066cm であり A 型燃料と若干異なる。臨界解析ではペレット直径が大きく反応度の高い A 型を対象としている。なお、17×17 燃料の A 型と B 型の表中に示す仕様は同じである。

第3表 臨界解析条件

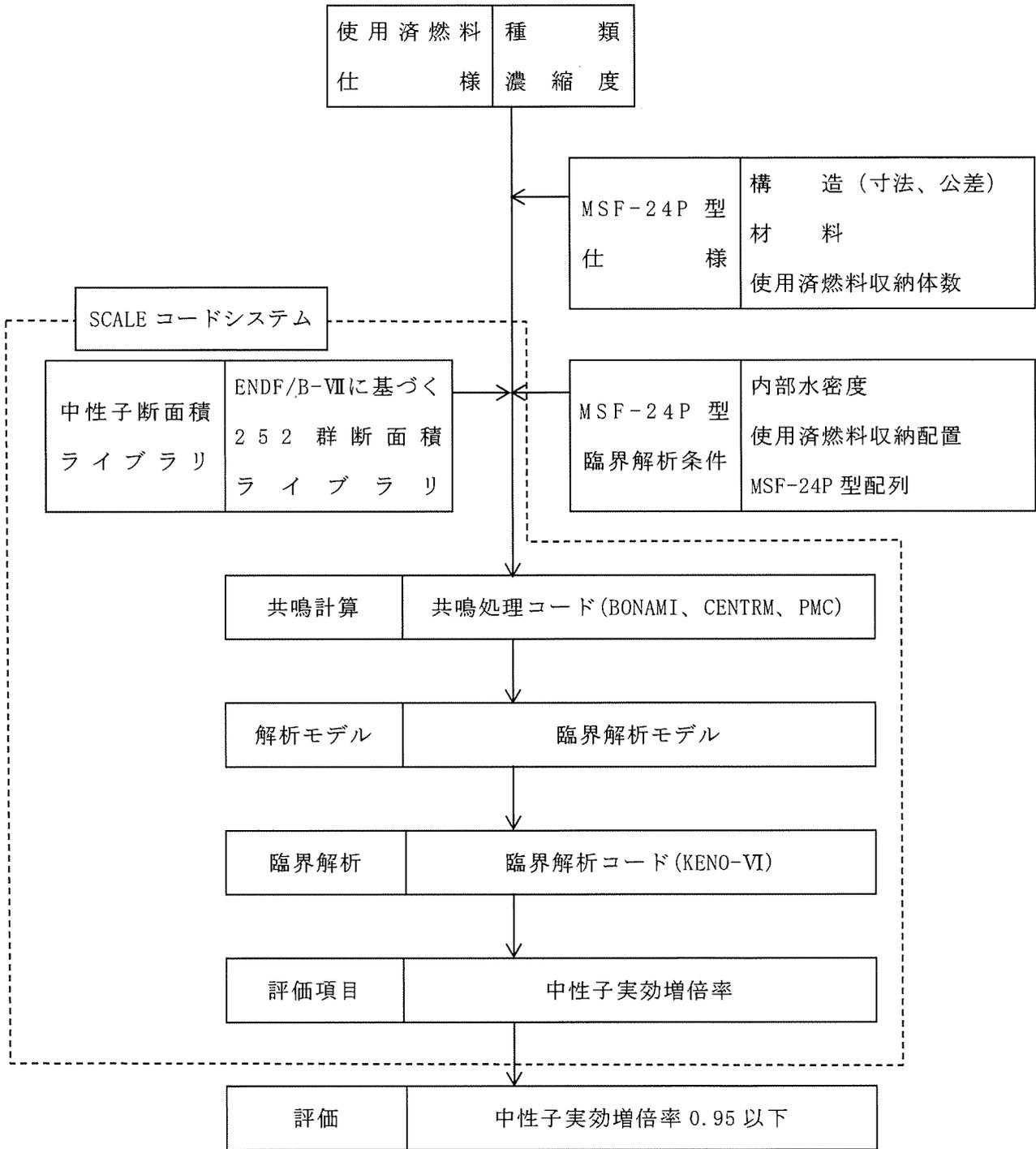
項目	内容	
臨界解析の方法	中性子実効増倍率は臨界解析コードを使用して、燃料棒単位セル計算により求まる核定数を用い、MSF-24P型の実形状をモデル化。	
解析コード	SCALE コードシステム (6.2.1) ・ 共鳴計算：BONAMI、CENTRM、PMC ・ 臨界解析：臨界解析コード KENO-VI (中性子ヒストリー数 <input type="text"/>) ・ 断面積ライブラリ：SCALE コードシステムに内蔵されている ENDF/B-VII に基づいて作成された 252 群断面積ライブラリ	
解 析 条 件	収納物	17×17 燃料及び 15×15 燃料
	濃縮度	17×17 燃料：4.2wt% 15×15 燃料：4.1wt%
	収納体数	24 体
	燃料配置 (注1)	17×17 燃料：第3図 (2/3) 及び第5図 (2/3) 参照 15×15 燃料：第4図 (2/3) 及び第6図 (2/3) 参照
	寸法条件 (注1) (第3図～ 第6図参照)	バスケットプレート幅、バスケットプレート内幅、バスケット格子内のり、中性子吸収材板厚の寸法は公差を考慮、胴内径はバスケットに接するように設定。設定根拠は第4表参照。
	MSF-24P 型内 雰囲気 (注1)	乾燥状態：真空 冠水状態：水密度 1.0g/cm ³ (MSF-24P 型内の水密度 1.0g/cm ³ とした場合に中性子実効増倍率は最大となる)
	MSF-24P 型外 雰囲気 (注1)	真空 (解析モデルを完全反射境界として MSF-24P 型外部に漏れ出た中性子が減速及び吸収されることなく反射して MSF-24P 型へ戻る)
	MSF-24P 型配列	無限配列 (MSF-24P 型周囲は完全反射境界)
	使用済燃料 集合体構造材	乾燥状態：真空 冠水状態：純水に置換 (構造材よりも中性子減速効果の高い純水とする)
	ほう素添加量	中性子吸収材に含まれるほう素添加量を仕様上の下限値に設定。 (¹⁰ B 面密度 <input type="text"/> g/cm ²) なお、設計貯蔵期間 (60 年) 経過後の中性子吸収材に含まれるほう素の減損割合は安全側に全中性子束を用いて評価しても 10 ⁻⁵ 程度であり、無視し得るレベルである。
	バーナブル ポイズン集合体	無し (中性子吸収効果のあるバーナブルポイズン集合体は安全側に無視)
	中性子遮蔽材	側部・蓋部・底部中性子遮蔽材は安全側に真空中に置換。
蓋及び貯蔵用緩衝体	一次蓋及び二次蓋を考慮。貯蔵用三次蓋及び貯蔵用緩衝体は安全側に真空中に置換。	

(注1) 燃料配置、寸法条件、MSF-24P 型内/外雰囲気の感度解析結果を別紙1に示す。

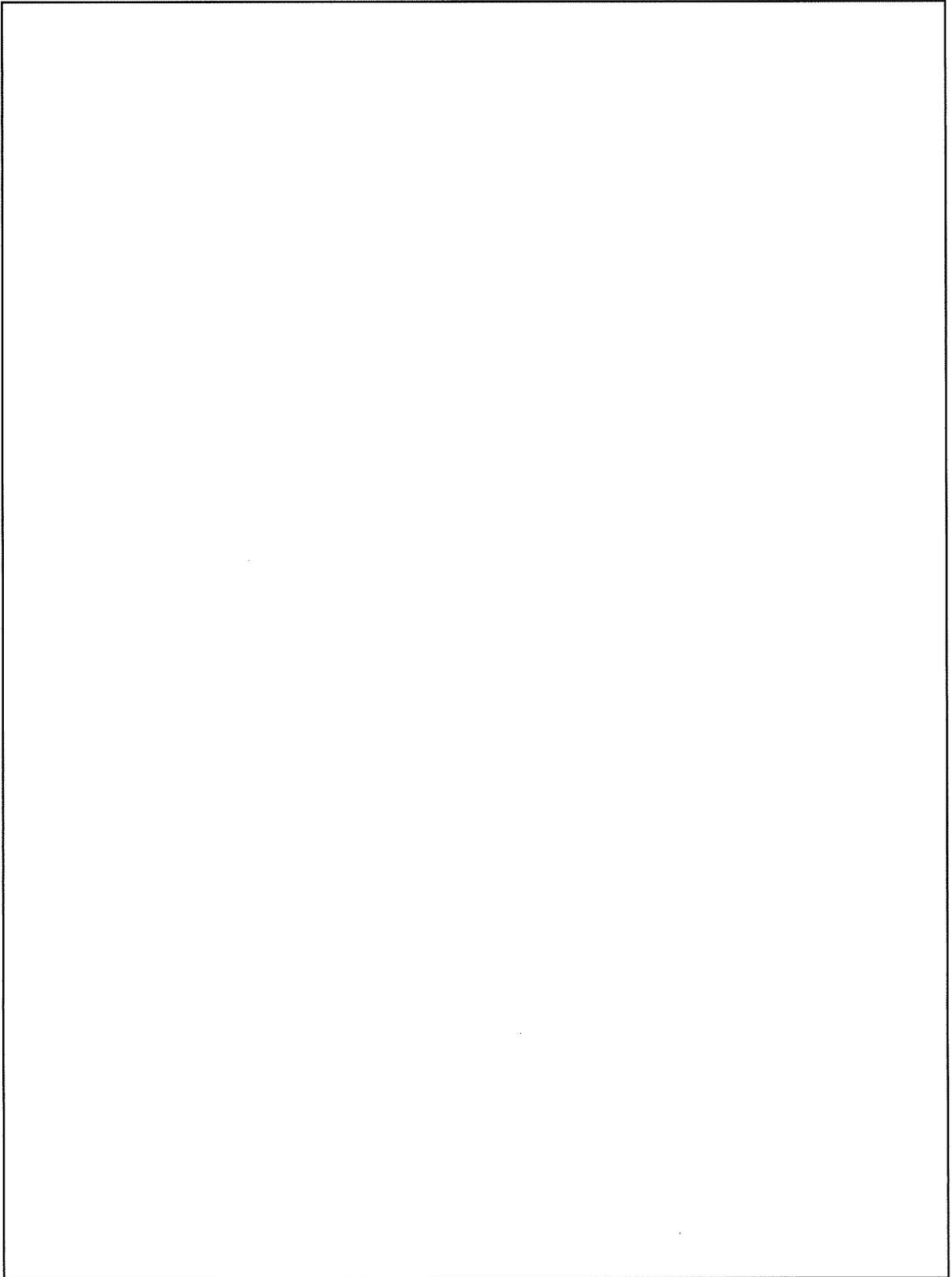
第4表 MSF-24P 型臨界解析モデル寸法条件 (17×17 燃料収納時及び 15×15 燃料収納時共通)

項目	寸法条件		条件設定根拠	
	乾燥状態	冠水状態		
バスケットプレート幅 (アルミニウム合金)	A-A 断面	最小 <input type="text"/> (cm)	最小 <input type="text"/> (cm)	隣接する燃料との距離が短くなるように乾燥状態、冠水状態共に最小としている。
	B-B 断面	最小 <input type="text"/> (cm)	最小 <input type="text"/> (cm)	
	C-C 断面	最小 <input type="text"/> (cm)	最小 <input type="text"/> (cm)	
バスケットプレート内幅 (アルミニウム合金)	A-A 断面	最大 <input type="text"/> (cm)	最小 <input type="text"/> (cm)	<ul style="list-style-type: none"> 乾燥状態ではバスケットプレートでの中性子吸収効果が小さくなるように最大としている (バスケットプレート幅を固定して内幅を最大とすることでバスケットプレート板厚が最小となる)。 冠水状態ではバスケットプレート内幅領域での中性子の減速効果を小さくし、中性子吸収材での中性子吸収効果が小さくなるように、バスケットプレート内幅を最小としている。
	B-B 断面	最大 <input type="text"/> (cm)	最小 <input type="text"/> (cm)	
	C-C 断面	最大 <input type="text"/> (cm)	最小 <input type="text"/> (cm)	
バスケット格子内のり	最小 <input type="text"/> (cm)	最大 <input type="text"/> (cm)	最大 <input type="text"/> (cm)	<ul style="list-style-type: none"> 乾燥状態では隣接燃料との距離が短くなるように最小としている。 冠水状態では燃料領域での熱中性子が増加するように最大としている。
中性子吸収材板厚 (ほう素添加アルミニウム合金)	最小 <input type="text"/> (cm)	最小 <input type="text"/> (cm)	最小 <input type="text"/> (cm)	隣接する燃料との距離が短くなるように乾燥状態、冠水状態共に中性子吸収材板厚を最小としている。

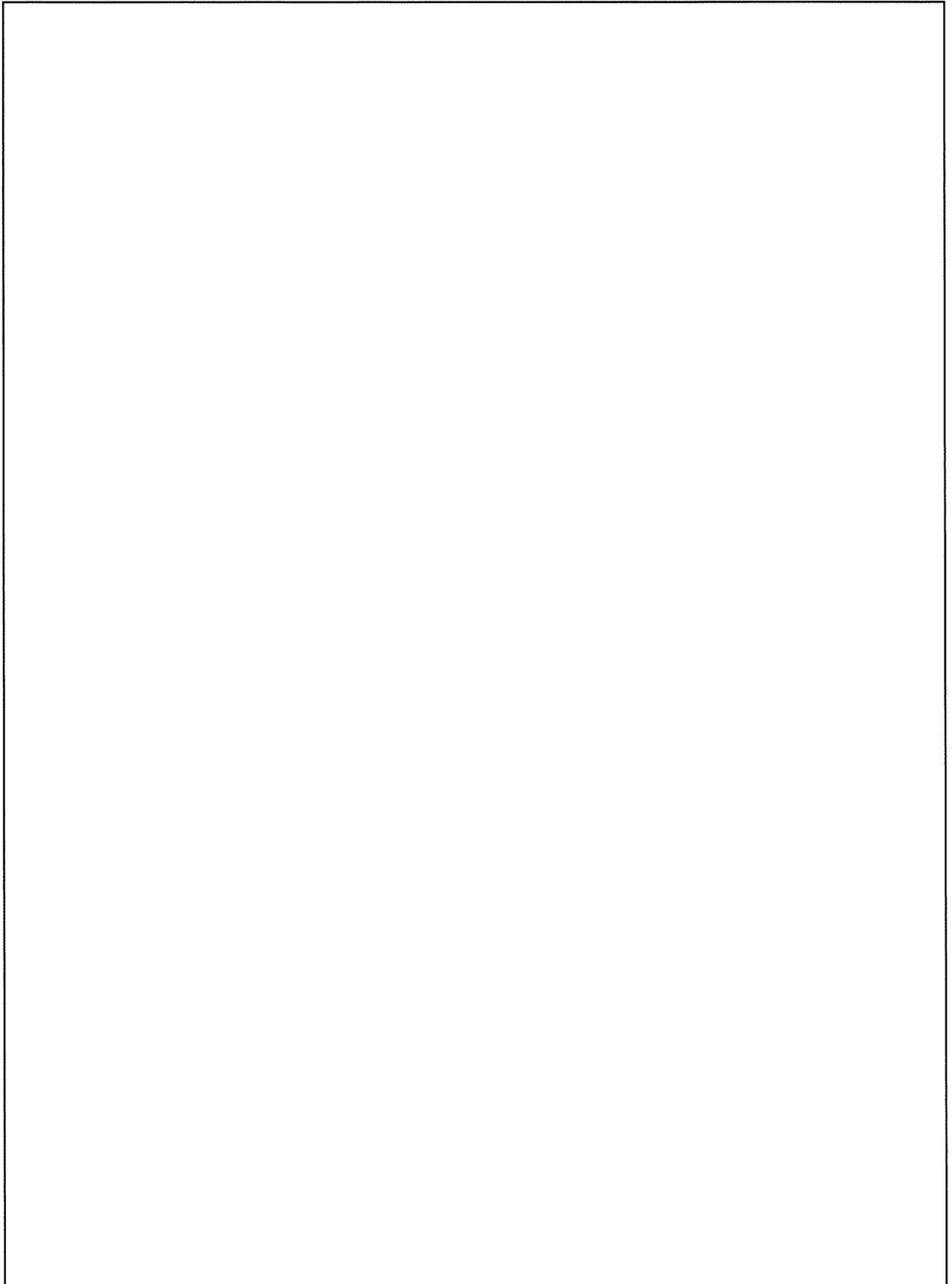
内は商業機密のため、非公開とします。



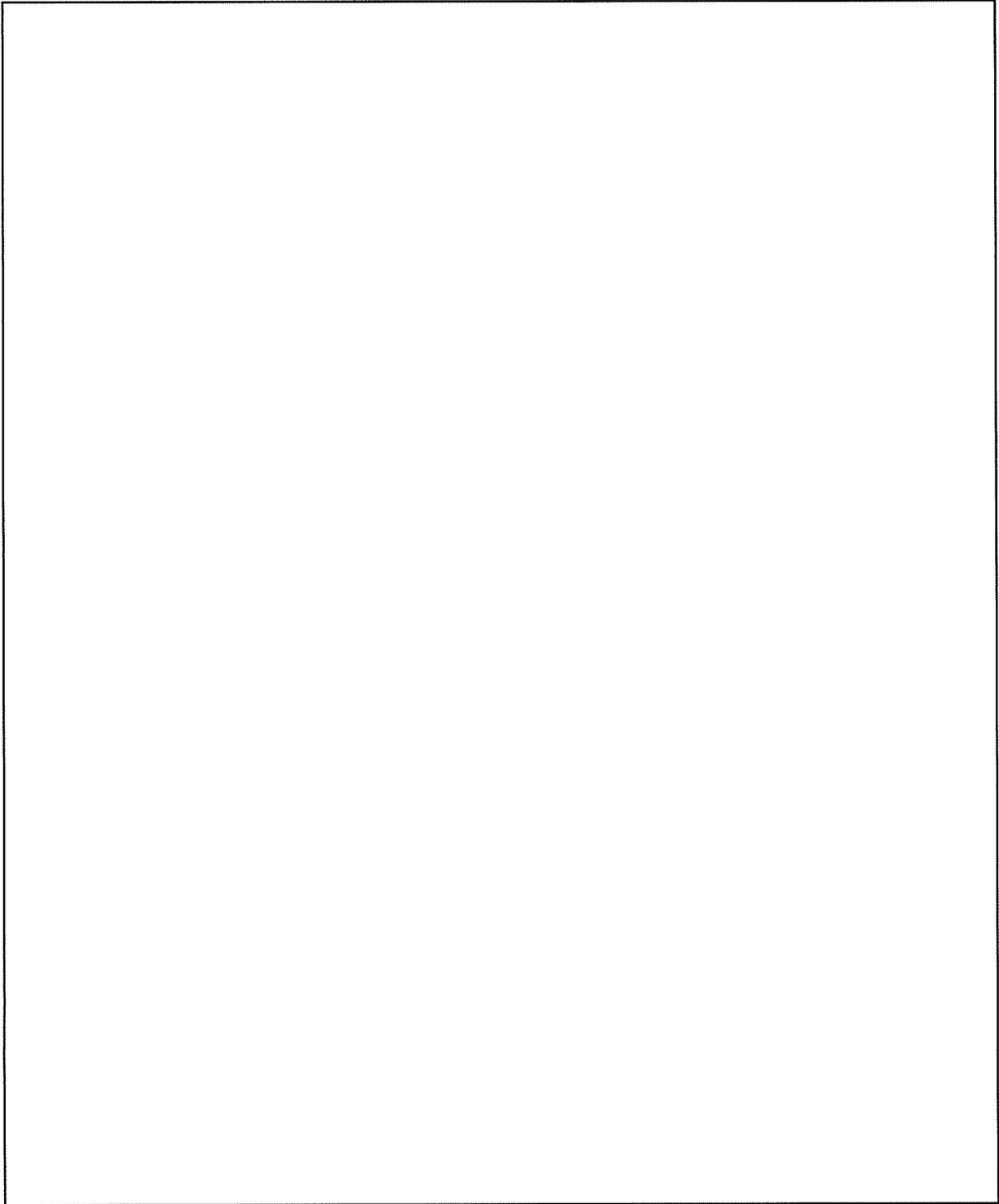
第2図 MSF-24P 型の臨界解析フロー図



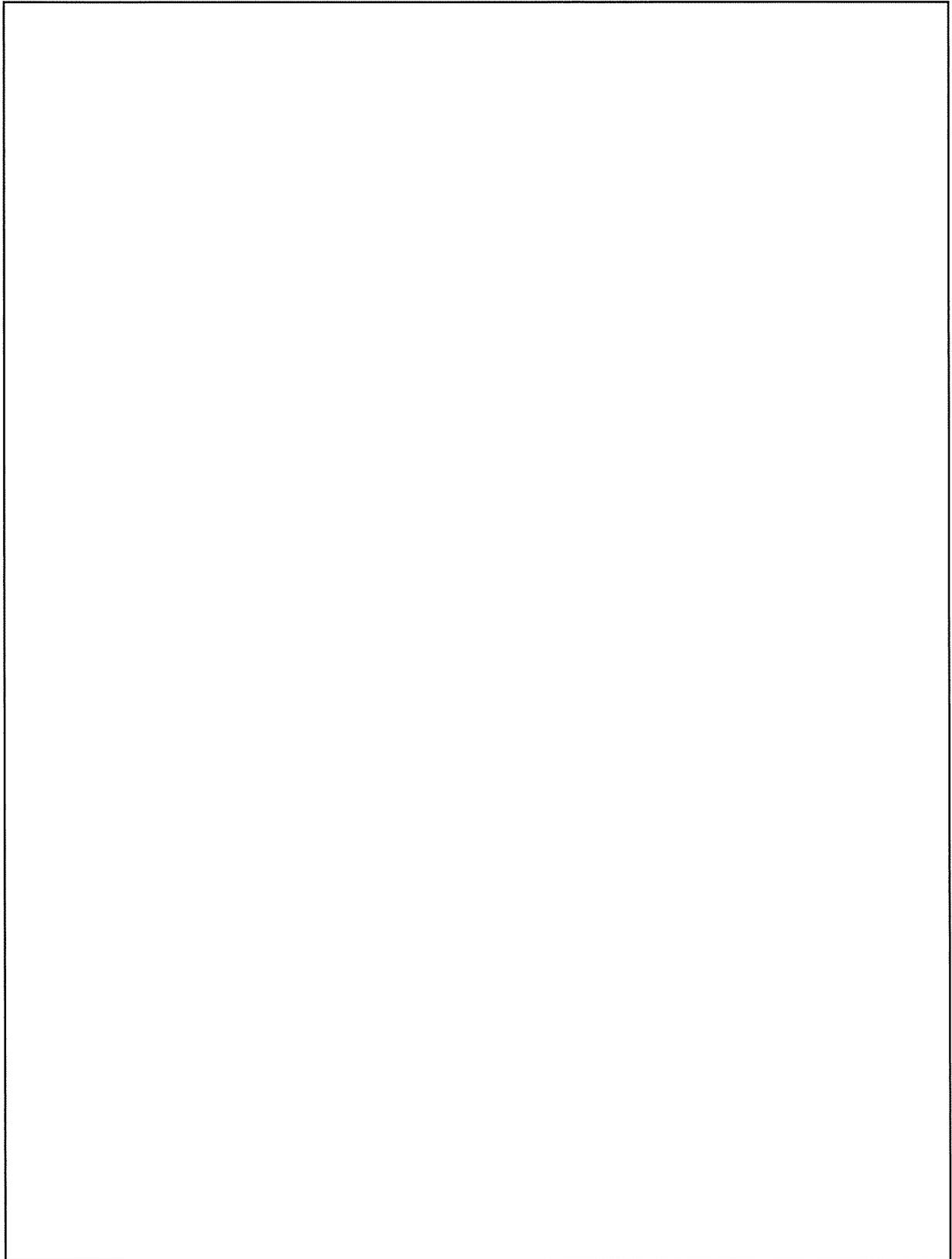
第3図（1/3） 臨界解析モデル（縦断面図）（17×17 燃料収納時）（冠水状態）



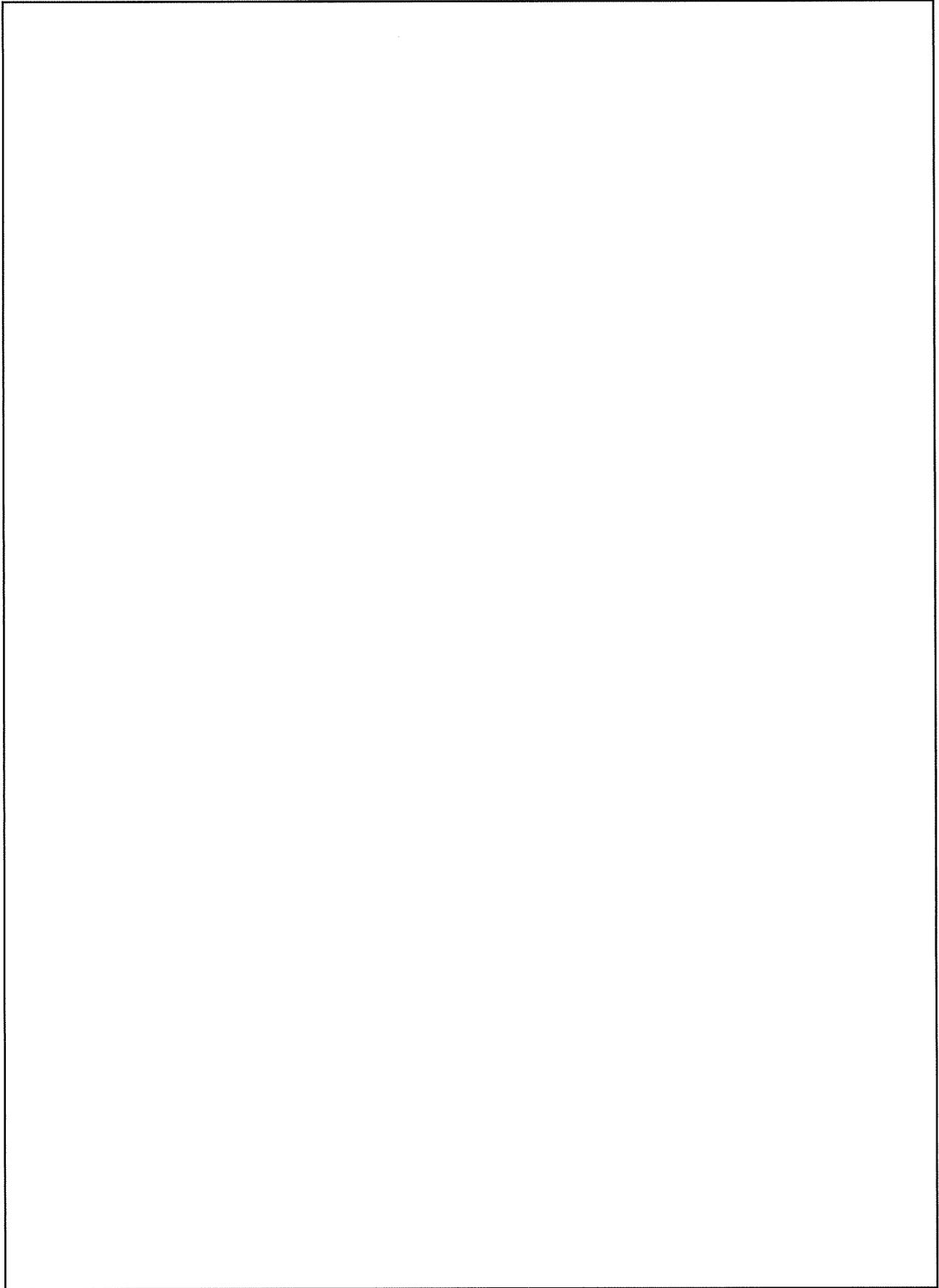
第3図 (2/3) 臨界解析モデル (燃料領域横断面図) (17×17 燃料収納時) (冠水状態)



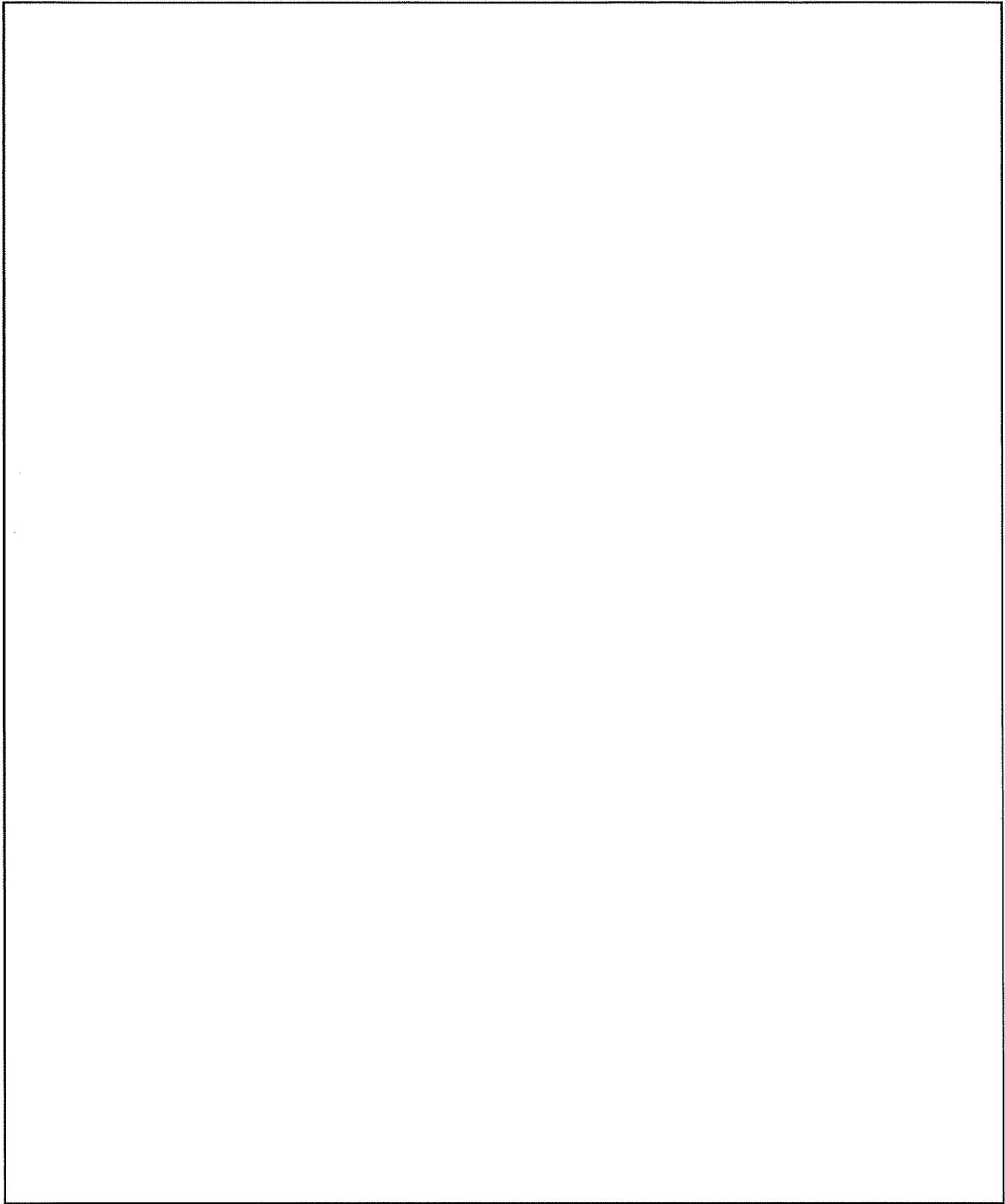
第3図 (3/3) 臨界解析モデル (燃料領域拡大図) (17×17 燃料収納時) (冠水状態)



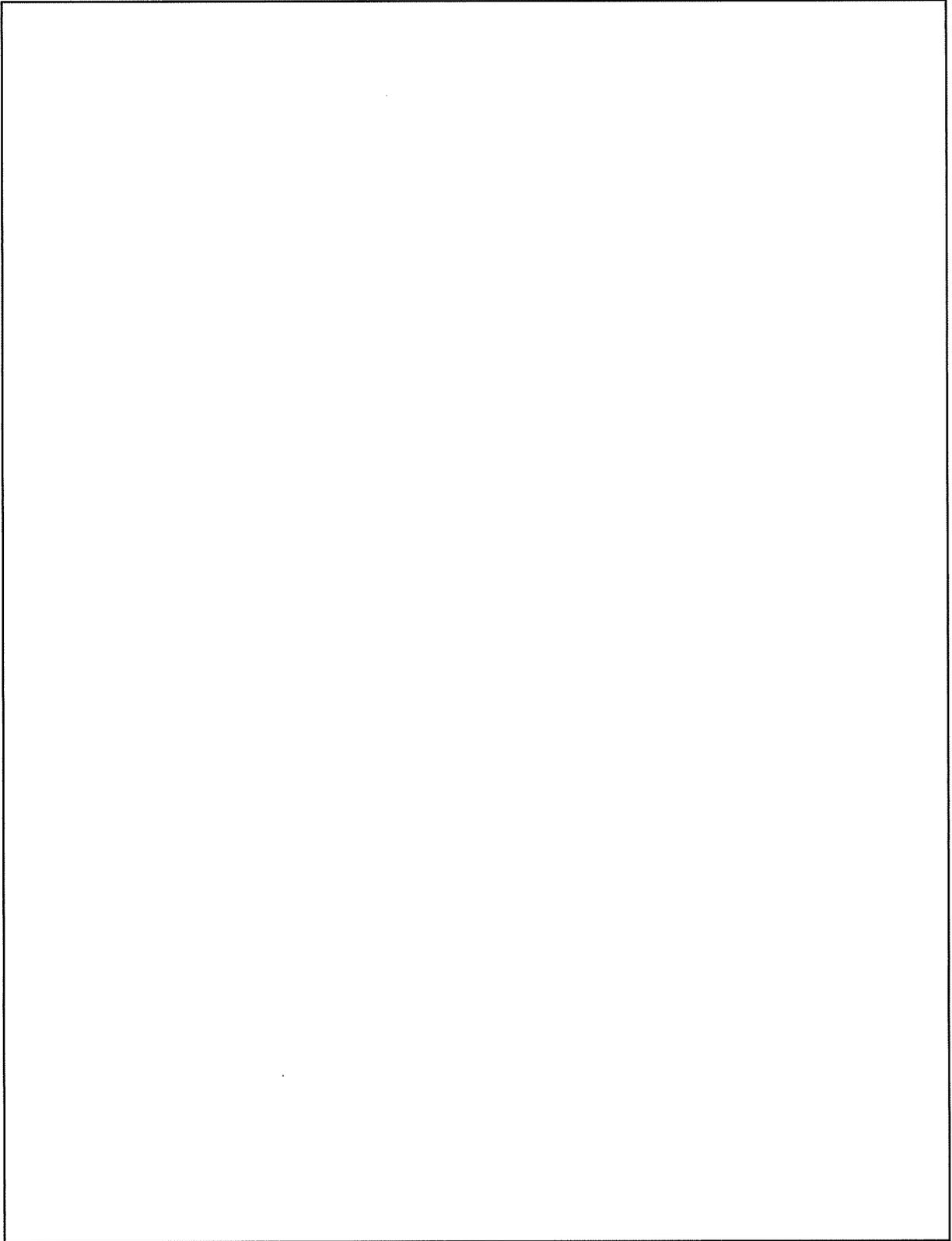
第4図 (1/3) 臨界解析モデル (縦断面図) (15×15 燃料収納時) (冠水状態)



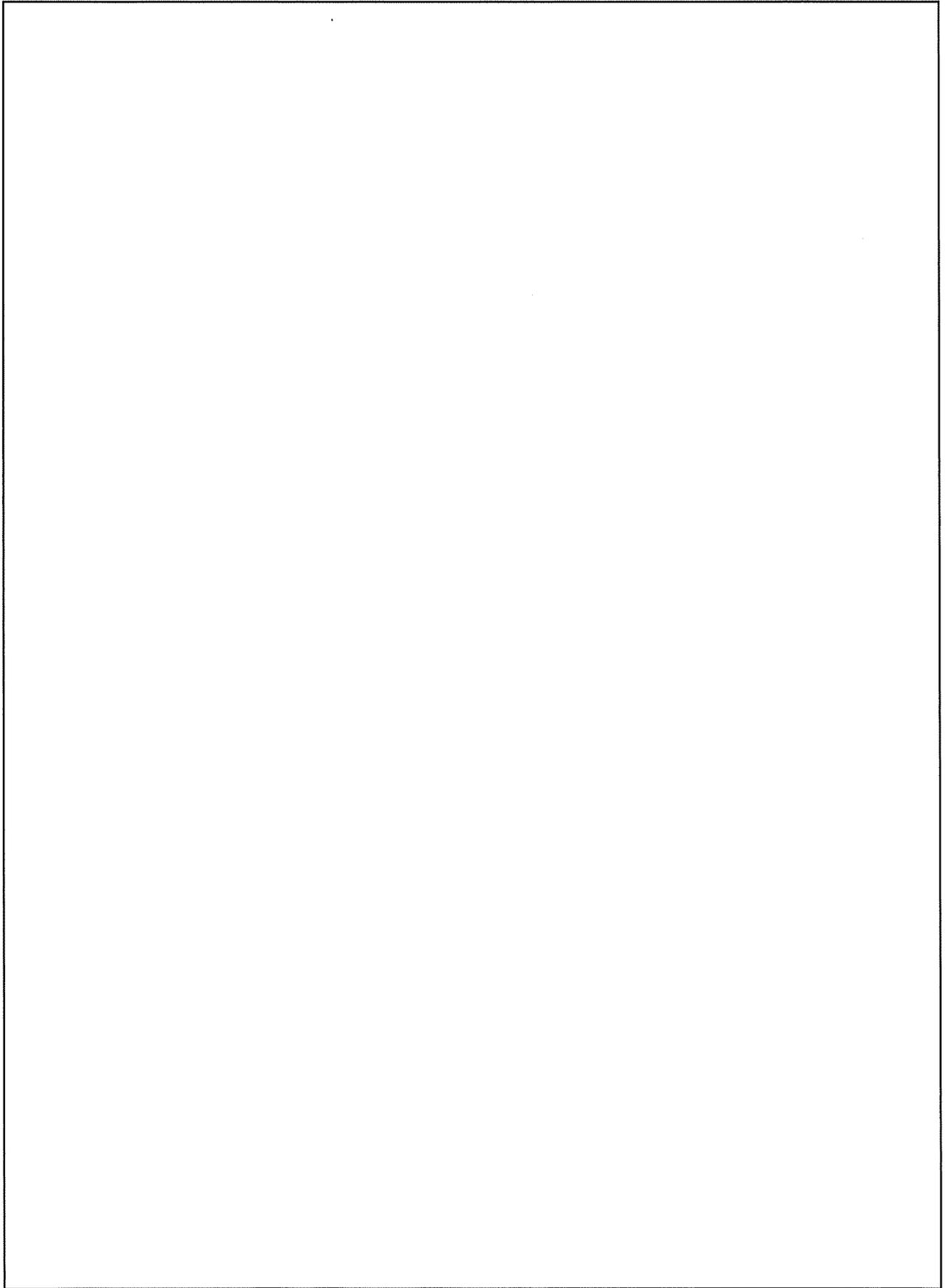
第4図 (2/3) 臨界解析モデル (燃料領域横断面図) (15×15 燃料収納時) (冠水状態)



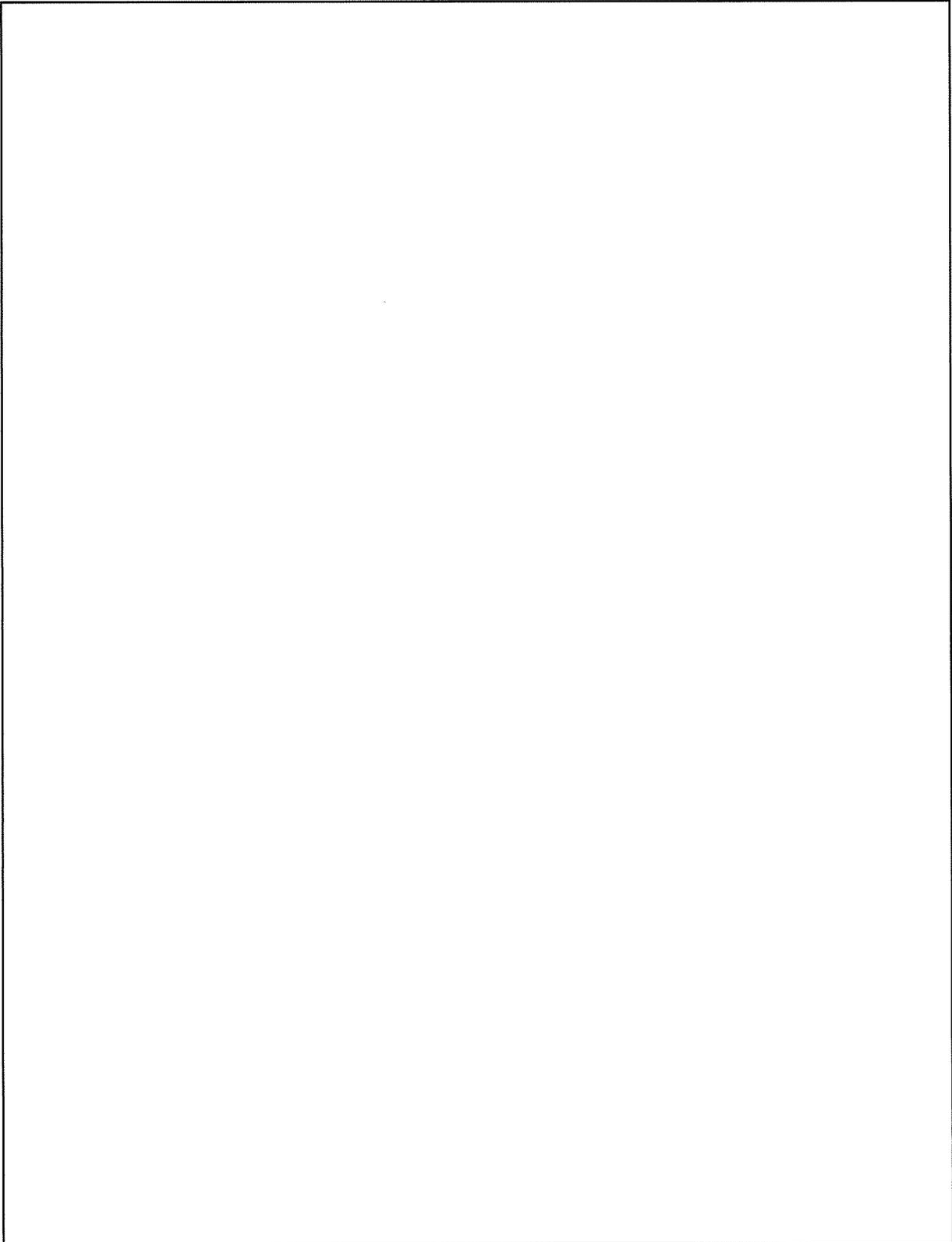
第 4 図 (3 / 3) 臨界解析モデル (燃料領域拡大図) (15×15 燃料収納時) (冠水状態)



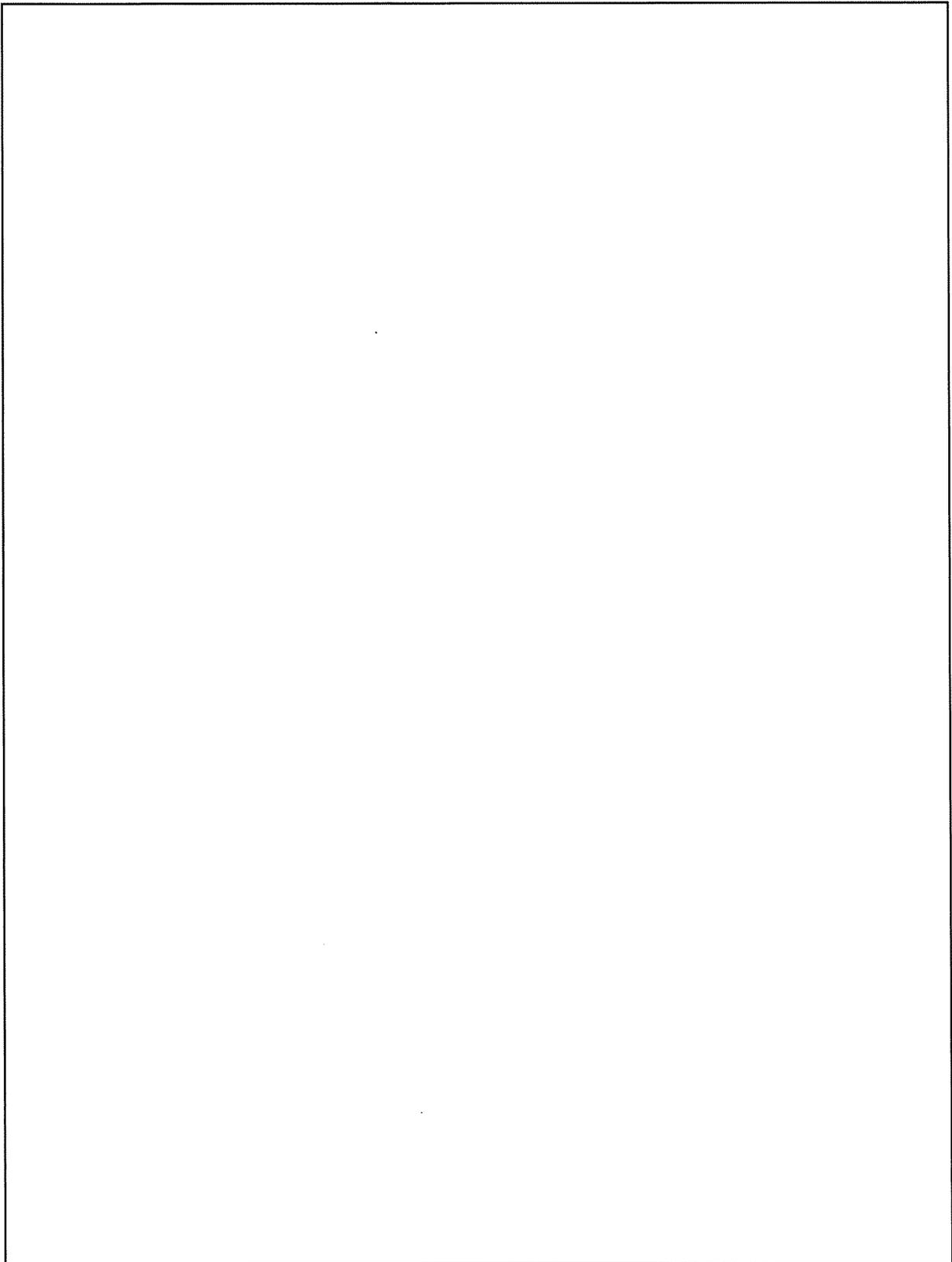
第5図 (1/3) 臨界解析モデル (縦断面図) (17×17 燃料収納時) (乾燥状態)



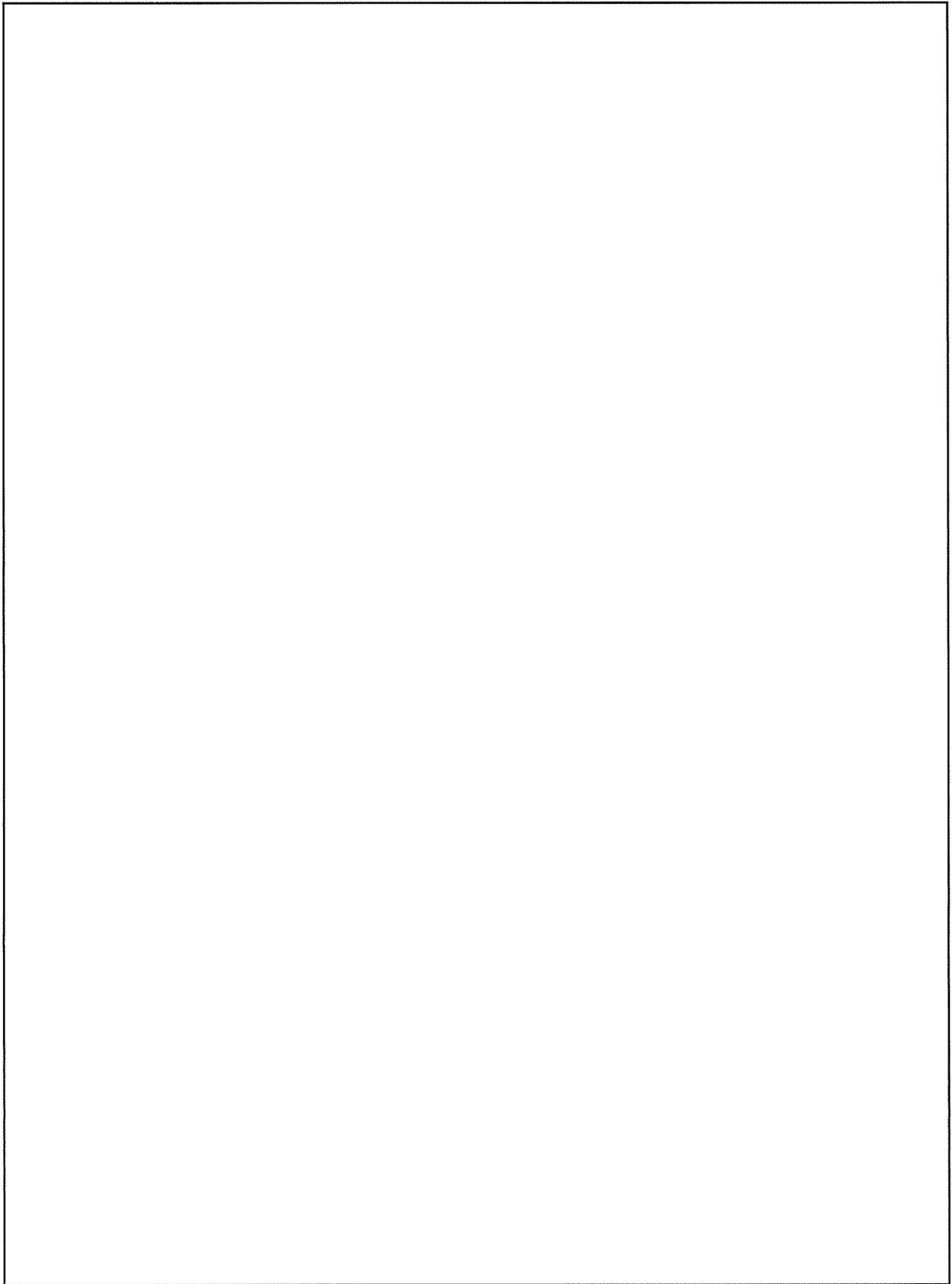
第5図 (2/3) 臨界解析モデル (燃料領域横断面図) (17×17 燃料収納時) (乾燥状態)



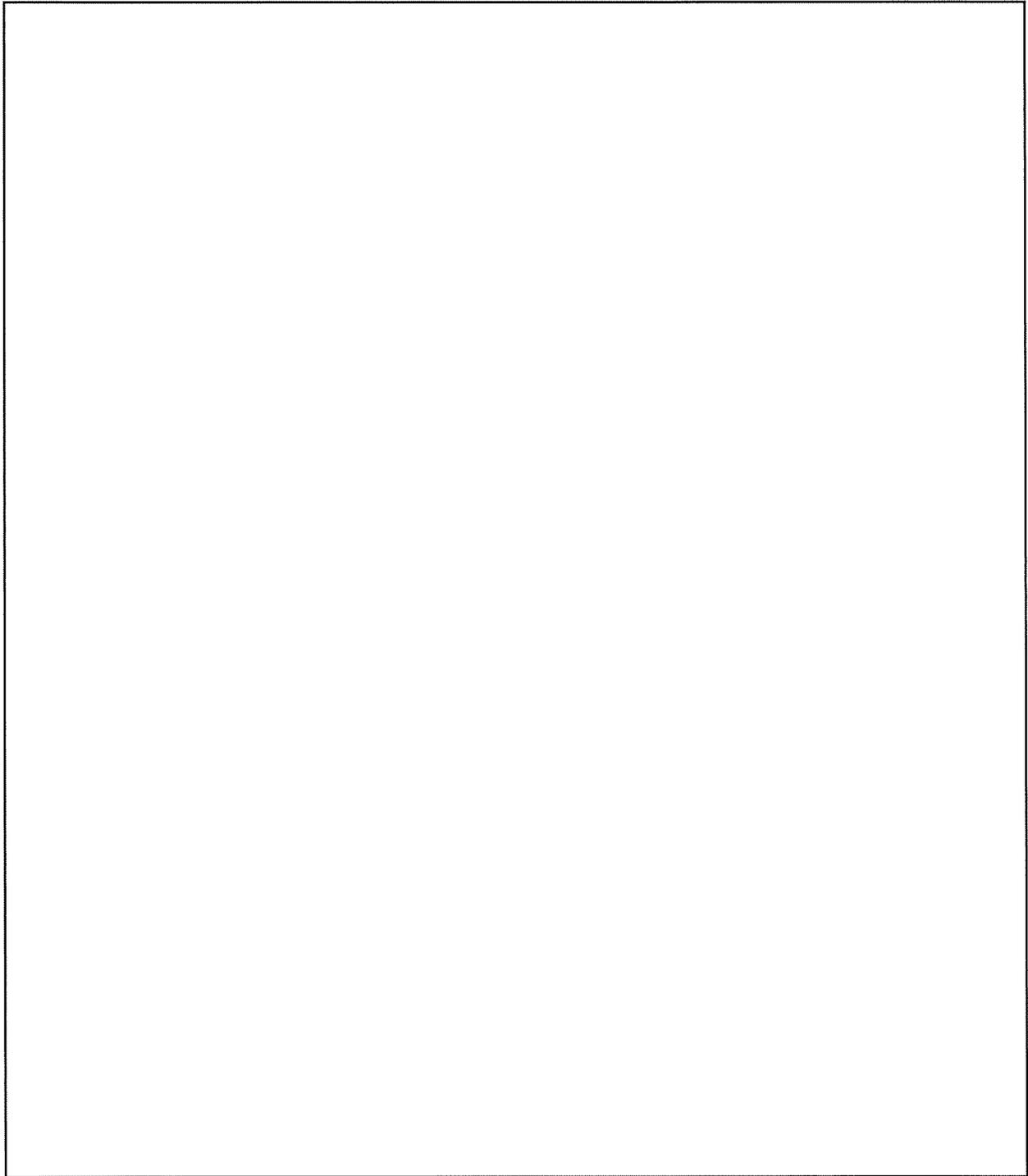
第 5 図 (3 / 3) 臨界解析モデル (燃料領域拡大図) (17×17 燃料収納時) (乾燥状態)



第6図 (1/3) 臨界解析モデル (縦断面図) (15×15 燃料収納時) (乾燥状態)



第6図(2/3) 臨界解析モデル(燃料領域横断面図)(15×15燃料収納時)(乾燥状態)



第6図 (3/3) 臨界解析モデル (燃料領域拡大図) (15×15 燃料収納時) (乾燥状態)

技術的に想定されるいかなる場合においても、第5表に示すとおり、評価基準を満たしている。

第5表 評価結果

項 目		評 価 結 果		評 価 基 準	備 考
		17×17 燃料 収納時	15×15 燃料 収納時		
中 性 子 実 効 増 倍 率	冠水 状態	0.912 (3σ:0.00135)	0.911 (3σ:0.00123)	0.95 以下 ⁽¹⁾	なお、SCALE コードシステムはモンテカルロ法であり統計誤差を伴うため、本評価結果は解析コードの精度等を考慮して、統計誤差(σ)の3倍(3σ)を加味した値である。
	乾燥 状態	0.385 (3σ:0.00039)	0.380 (3σ:0.00039)		

〔確認内容〕

- 5) 設計上、バスケットの塑性変形が想定される場合は、塑性変形したバスケットの形状及び使用済燃料の状態を考慮しても未臨界が維持されること。

MSF-24P型は、設計上考慮すべき自然現象(地震、津波及び竜巻)、及び地震時に想定する波及的影響(クレーン・貯蔵建屋損壊による重量物落下及びMSF-24P型の落下・転倒)に対しても、バスケットに塑性変形が生じない設計とする(詳細は設置許可基準規則第4条、第5条及び第6条の適合性説明資料で説明)。したがって、設計上想定される状態においてバスケットに塑性変形は生じない。

3. 参考文献

- (1) 日本原子力研究所, 「臨界安全ハンドブック第2版」, JAERI 1340, (1999).

臨界解析における条件設定根拠について

臨界解析条件のうち、燃料配置、寸法条件（バスケットプレート幅・バスケットプレート内幅・バスケット格子内のり・中性子吸収材板厚）及び MSF-24P 型内/外雰囲気を変化させて各条件の感度を 17×17 燃料を収納した条件にて確認する。

感度解析結果を別紙 1-1 表に示す。感度解析結果より、臨界解析条件が安全側の条件であり、臨界解析条件の設定根拠は妥当である。

別紙 1-1 表 感度解析条件及び評価結果 (17×17 燃料収納時)

項目	乾燥状態		感度解析結果 Δk (注3)	冠水状態		感度解析結果 Δk (注3)
	感度解析条件 (注2)			感度解析条件 (注2)		
燃料配置 (別紙 1-1 図参照)	①中心偏向配置		—	①外周燃料外周偏向配置		—
	②バスケット格子内中央配置		-0.0007	②中心偏向配置		-0.0021
	③外周偏向配置		-0.0016	③バスケット格子内中央配置		-0.0019
				④外周偏向配置		-0.0048
バスケット プレート幅	①最小 (A-A 断面 <input type="text"/> cm) (B-B、C-C 断面 <input type="text"/> cm)		-0.0006	①最小 (A-A 断面 <input type="text"/> cm) (B-B、C-C 断面 <input type="text"/> cm)		-0.0003
	②最大 (A-A 断面 <input type="text"/> cm) (B-B、C-C 断面 <input type="text"/> cm)			②最大 (A-A 断面 <input type="text"/> cm) (B-B、C-C 断面 <input type="text"/> cm)		
バスケット プレート内幅	①最大 (A-A 断面 <input type="text"/> cm) (B-B、C-C 断面 <input type="text"/> cm)		-0.0004	①最小 (A-A 断面 <input type="text"/> cm) (B-B、C-C 断面 <input type="text"/> cm)		-0.0029
	②最小 (A-A 断面 <input type="text"/> cm) (B-B、C-C 断面 <input type="text"/> cm)			②最大 (A-A 断面 <input type="text"/> cm) (B-B、C-C 断面 <input type="text"/> cm)		
バスケット 格子内のり	①最小 (<input type="text"/> cm)		-0.0022	①最大 (<input type="text"/> cm)		-0.0055
	②最大 (<input type="text"/> cm)			②最小 (<input type="text"/> cm)		
中性子吸収材 板厚	①最小 (<input type="text"/> cm)		-0.0005	①最小 (<input type="text"/> cm)		-0.0012
	②最大 (<input type="text"/> cm)			②最大 (<input type="text"/> cm)		
MSF-24P 型内筒囲気	—		—	水密度 0.0~1.0g/cm ³		別紙 1-2 図参照
MSF-24P 型外筒囲気	水密度 0.0~1.0g/cm ³		別紙 1-3 図参照	水密度 0.0~1.0g/cm ³		別紙 1-4 図参照

(注1) 乾燥状態は第5図を、冠水状態は第3図を参照。

(注2) 申請書記載値の解析条件 (第2表から第4表) から各感度解析条件のみを変更した。各項目の①は申請書記載値での解析条件である。

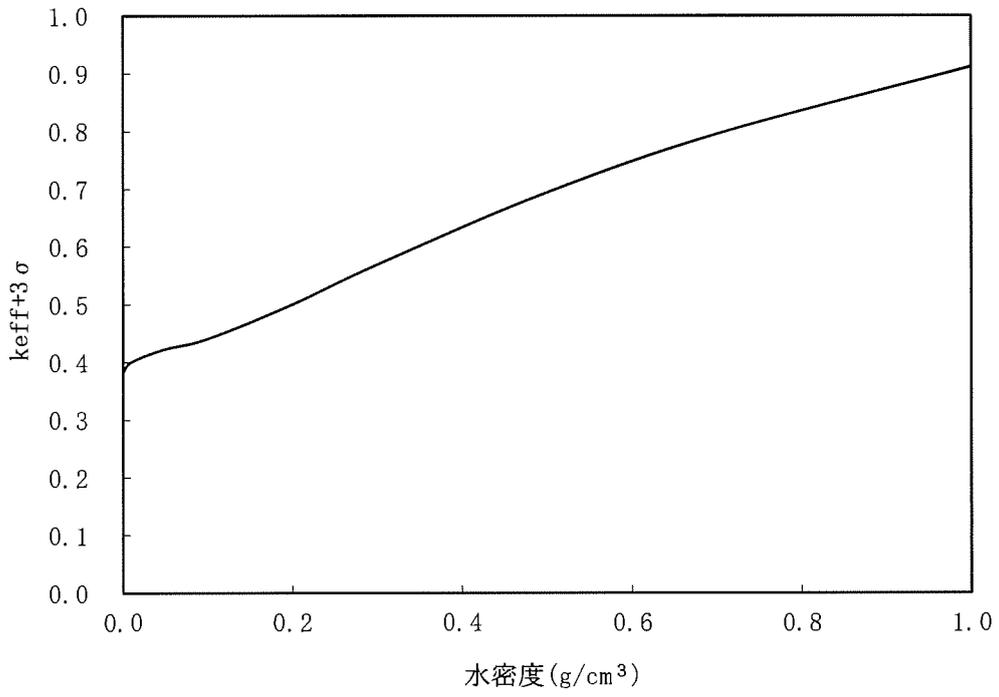
(注3) 感度解析条件 (②、③及び④) での中性子実効増倍率から申請書記載値での解析条件 (①) での中性子実効増倍率を差し引いた値。

(Δk = (感度解析結果) - (申請書記載値))

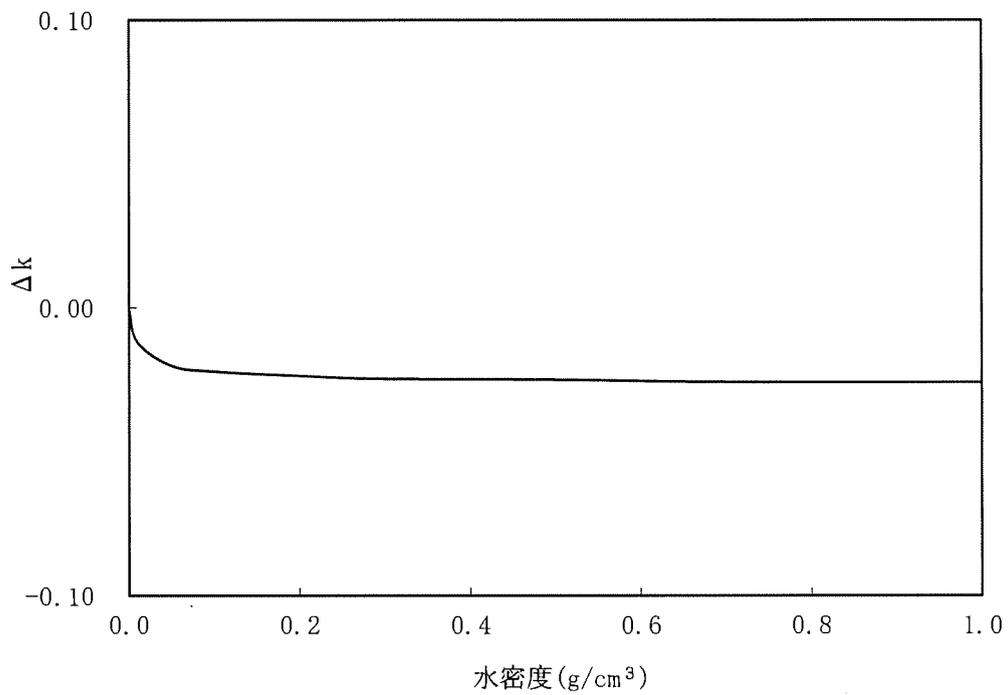


別紙 1-1 図 燃料配置感度解析条件

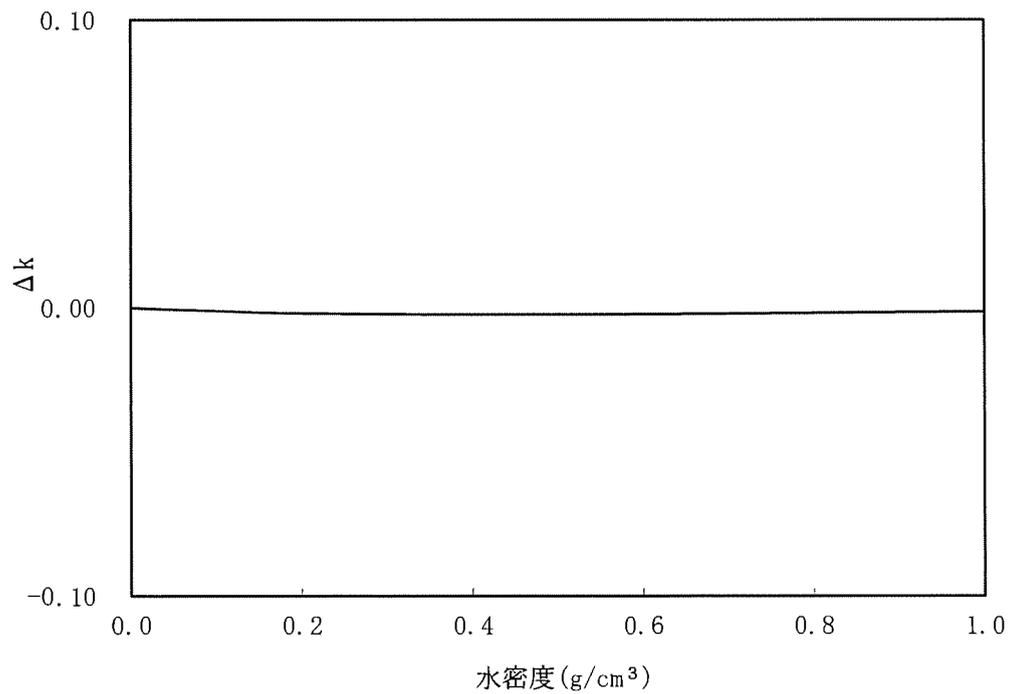
(注) 冠水状態では体系内の中性子が減速され、中性子吸収材の中性子吸収効果が大きい。外周バスケットプレートには中性子吸収材が配置されていないため、冠水状態については外周部に配置された燃料はキャスク外周に寄せて、中央部に配置された燃料はキャスク中心偏向配置とした評価を実施した。



別紙 1 - 2 図 MSF-24P 型内雰囲気評価結果



別紙 1 - 3 図 MSF-24P 型外雰囲気評価結果 (乾燥状態)



別紙 1 - 4 図 MSF-24P 型外雰囲気評価結果 (冠水状態)

臨界解析に使用する解析コードについて

MSF-24P 型の臨界防止設計に用いる解析コードについて、その機能、計算方法、使用実績及び検証結果について説明する。

a. SCALE コードシステム

i 概要

臨界解析には、米国のオークリッジ国立研究所（ORNL）で開発された公開の SCALE コードシステム⁽¹⁾を用い、中性子実効増倍率の計算には同コードシステムに含まれる KENO-VI コードを用いる。

SCALE コードシステムは、米国 NRC により認証された標準解析コードであり、国内外の臨界解析の分野で幅広く使用されている。

ii 機能

SCALE コードシステムは、臨界解析に際して以下の特徴を有している。

- ・燃料及び構造材の材質組成と幾何形状を与えることにより、断面積作成から中性子実効増倍率評価まで一連の解析を実行できる。
- ・三次元輸送計算コードであり、複雑な幾何形状における臨界計算が可能である。

iii 解析フロー

SCALE コードシステムの解析フローを別紙 2-1 図に示す。

iv 使用実績及び検証

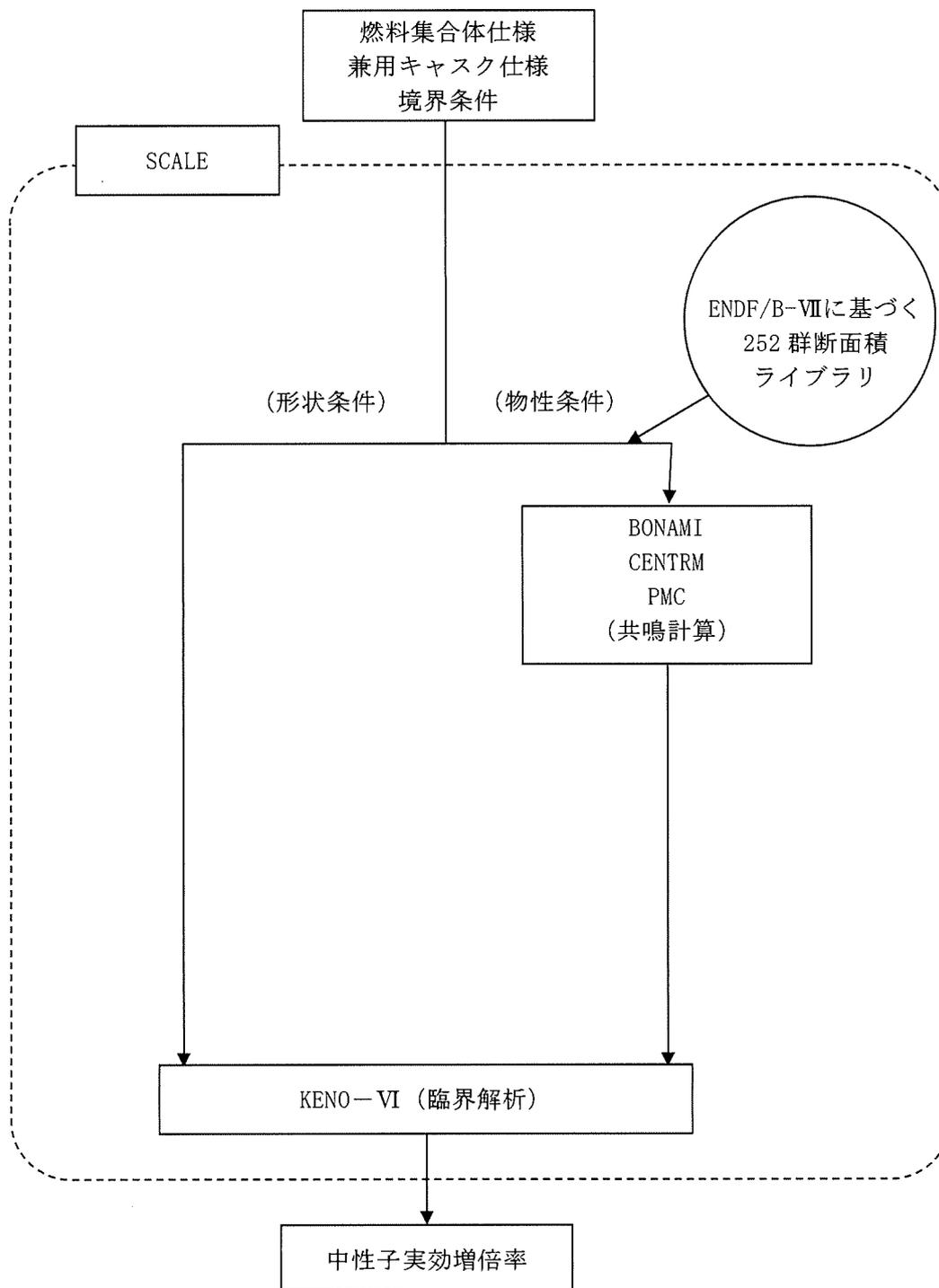
臨界解析で使用した SCALE コードシステムに対しては、兼用キャスクを模擬した多数の臨界実験のベンチマーク解析を実施し、その妥当性を確認している。

文献(2)に示す実験について、収納物である使用済燃料の仕様並びに下記①～⑥の条件を考慮し、ベンチマーク解析を実施する臨界実験を選定した。別紙 2-1 表に示すとおりベンチマーク解析は実験を良く再現しており、妥当な結果が得られている。

- ①燃料棒を配列した集合体が水中に単独で存在する場合
- ②複数の集合体が近接して配列する場合
- ③この集合体の配列の間に鋼板、中性子吸収材（ほう素）を含む板が存在する場合
- ④集合体に近接して反射体（鋼板、鉛）を配置した場合
- ⑤水中に中性子吸収材（ほう素）が溶解している場合
- ⑥乾式貯蔵の条件を模擬し、減速材を用いない場合

別紙2-1表 ベンチマーク解析結果

	ケース数	平均値	標準偏差	最大値	最小値
臨界実験 (1)		0.99961	0.00304	1.01172	0.99651
臨界実験 (2)		0.99776	0.00264	1.00055	0.99363
臨界実験 (3)		1.00279	0.00259	1.00452	0.99981
合計		0.99940	0.00309	1.01172	0.99363



別紙 2-1 図 SCALE コードシステムの解析フロー図

(参考文献)

- (1) B. T. Rearden and M. A. Jessee, Eds., “SCALE Code System” , ORNL/TM-2005/39, Version 6.2.1, Oak Ridge National Laboratory, Oak Ridge, Tennessee (2016).
- (2) Organisation for Economic Co-operation and Development Nuclear Energy Agency, “International Handbook of Evaluated Criticality Safety Benchmark Experiments” , NEA/NSC/DOC(95)03, (2006).